詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems

第 11 号
2017 年 3 月

目　次

	伊東友乃	レモン　1
		どうぞ　2
		地平線　4
		今朝　6
	青海一粟	バロック　8
	画図佳織	食事　10
		ひどい冬　12
		夕食後　14
	関根全宏	釣り師　16
		異物　18
	戸張雅登	妙法寺　20
	竹中七海	花言葉　22
	畑ゆめじ	満天の星　23
		饗宴　24
		大黒埠頭に立ち　26
		火葬　28
	藤井夏子	死ぬ希望　30
	渡辺信二	わがひとに与える挽歌　32
		小説家志望　34
		シャボン玉から　36
表紙原画	鈴木順三	表紙「パラレルな夜 1」
		裏表紙「パラレルな夜２」

レモン

伊東友乃

くしゃみをしたから
レモンを絞るんであって
けっして天に召されるからでない
灰色の朝に
わたしの心には　ひろびろとした海がひろがり
あの白波に　あのざぶんざぶんに
この身ひとつで対峙して
吠え声をあげようかとそんなことを思うが
またひとつくしゃみがでて
ひしゃげていくレモンに
全身全霊をささげることにひとまず

どうぞ

伊東友乃

お湯が沸騰して
ぐっぐっいっているうちに
湯気を
吸って吐いてをくりかえしても
このかたくなな
季節は動きようもなく
外界をどこまでも
あわい灰色にそめあげるのであって
希望というか　好みというか
ひとつくらい桜色のポイントが
あってもいいのではと思うのだけれど
それは世界のすこやかな
鈍感なぶぶんもあるので
このびびたるわたしの
気持ちは受け止めてくれずに結構

どこまでも灰色に
流れゆくままに　どうぞ

地平線

伊東友乃

ぐるり眼球をまわしてみれば
うらがわに極彩色の
季節
があるかもしれないね
今日　子宮が教えてくれたのは
もはや人類史
ふかぶかと記憶にとどめるには
頭の容量の問題
パタゴニアの雪のあいだからのぞく
土の黒さが
何かをひっこぬかれたあとみたいで
その何かがわからない怖さ
子宮よ　きみの大きさについて
考えるとき　たしかに
大地を見おろしている気持ちになる
くりかえし泡だっていく地平線に

すいこまれていくのは
あれは　煙か雲のどちらかで
けっして　きみではないから
安心するとよい

今朝

伊東友乃

親指の
くいと曲がるところがずっと痒い
ひとなめしてみれば
マーマレードジャムと
わずかにオリーブの味
今朝
これまで生きてきたなかで
断ちきれないものについて考えてみたけれど
おもての雨をみつめると
つるつると
思考は　濁った雲へと
のぼっていってしまうばかり
庭をみわたして
ひとつ感心するのは
この季節の性質
変わろうとみせかけながら

じらすのが得意で
そのまま咲きそうにない蕾をつけた草も
翻弄されっぱなし
うなだれていくのは
確かめたいから
しずかに　タイミングをはかって
いっきに終らせる
軽い　息のかたまりがひとつ
浮かんでいく

バロック

青海一粟

（※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白）

食事

画図佳織

何かがすこしずつ壊されていく
だけど　食べ続けた
大切な人と食べ続けた

遠くでは
壊されていくものが
地上で星がうまれたかのように
夜には光って見えて
朝になると
剥き出しの灰色のなか
家だったり　病院だったり
公園だったり
人間だったりした

駅前のスーパーでは
黒ずんだ結婚指輪が

スイカにまぎれて売られていたり
名前が刺繍された
真新しいバッグが
レジ袋代わりに使われて
ごみ箱に捨てられていた

わたしのまわりでも
もらった本とか手紙とか
捨てるはずのないものが消えて
間違って捨ててしまったの
と　いるはずの人に聞いた
皿のうえには
壊された人が横たわっていた

わたしはひとりで食べた

ひどい冬

画図佳織

最強の寒波が二度もやってきた
寒いだけで雪も降らないから
身も心も乾燥しがちで
脳みそのしわまでなくなり
つるつるになる

買い物にも出たくなくて
冷蔵庫のドアを開けると
四分の一の大根と
しなびた人参と
ラップからはみ出た白菜が
まだ残っていた
野菜室の底で干からびている土は
わたしの死んだあとみたいで
不用意なくしゃみで
見事に飛び散ってしまうほど

少ししかなく
そのままドアを閉めた

今時の水分を含んだ言葉から
広がっていく風景を
どうしても断ち切りたいのに
ここまで空気が乾いてくると
喉のおくから
あまい水を求め
吸いよせられてゆく

季節は極度の乾燥状態
うるおう言葉をぜんぶ干して
残った野菜もぜんぶ干して
思い切り砕いたら
冷蔵庫の土といっしょに
この冬一番の強風に
飛ばしてしまえ

夕食後

画図佳織

食器も片づけないまま
椅子にすわって
とりとめもなく何か思い出そうと
いろんな思い出を引っ張り出してみる
それなのに、手にしたとたん
思い出すことは
どこか他人行儀で
何かがたしかに変わっている

色も音もあいまいで
台詞も新人俳優みたいに途切れがち
わたしではないだれかにとって
大事だったことなど
すっかり抜け落ちて
出来事の解釈は一通りではない

生まれてから今日まで
寝ている間はともかく
わたしには現実しかなかった
したくないことをしても
しなくていいことをしても
したいことをしたときと同じように
胸には何かが押し寄せてきた
一度してしまったことは
変えられないはずなのに
過ぎ去った現実は
わたしの手で
現実であることを剥奪されている
それでも

開け放したままの窓から
木々の葉が風ですれる音や
ヒメギスの鳴き声を聞いていると
現実を翻弄してきたわたしたちの謎が
いつかは解けるような気もして
まだしばらくは一人きりでいる

釣り師

関根全宏

寒風吹きすさぶ北国の
鮭が跳ぶ川は　神ですか

北国の王者
オヘライベを求め
水の中に手を垂れ
川底の窪み
流木の陰に
疑似餌を落とすと
時間が動きだし
水の中で　静かに
何かが生まれる音がした

北空に雲垂れ込める頃
雨が水面を
ぴしゃぴしゃと

跳ねた
あの　大きな
黄金色の
膨よかな魚体は
虚脱だけを残し
私の前からいなくなった

釣り竿が揺れる
ゆらゆらと
ゆれる　一瞬の　煌めく影に
私は　死んだあいつの
姿を幻視した

異物

関根全宏

なんて遠いのだろう
あれは不意に訪れた
世界の終わりだった
それとも　何かの誤差だった
とはいえ　人一人死んでもなお
世界は何も解消などしなかった
あの宵闇に囀る鳥の命が
震える白熱灯の熱量とともに
私の記憶の中で異音となった

あんなにも遠いのに
死はいかようにも
私を見つめるのだった
見つめられる私は
抵抗も執着もせず
あの密度の高い夏の夜の質量と

未だ和解することもできず
いつまでも　小さな墓碑銘の
ざらついた黒い表面を見つめ
存在しない形式について考えている
ただの異物である

妙法寺

戸張雅登

冬初め　祖父に連れられ　妙法寺
葉のない木々が　寒さに耐える

重たそうな仁王門をくぐり
高波いただく祖師堂に圧倒される

沖に消えた日蓮の　帰りを祈る日朗上人
朝から晩まで彫り続けた日蓮像

渡り廊下でつながる本堂　日朝堂　二十三夜堂
干上がった海に浮かぶ島々を横目に

祖父の後をついて　境内を大きく一周
焼かれる落ち葉に気を取られ

冬は秋には戻れないと
やせ細った祖父の背中は遠ざかる

無音　無風の空間で
土埃と　燃える落ち葉の匂い

毎年冬が来ると　思い出す妙法寺
今年も感じる　祖父の気配

花言葉

竹中七海

（※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白）

満天の星

畑ゆめじ

あの夜ほど　うつくしい星空を
わたしはほかに知らない

ただ立ち尽くし　見上げるしかない
恐ろしいほど
恐ろしいほど　無数の光が散らばって
頭の上に降って　わたしを
血だらけにする　と思った

人は死んだら星になると
言ったのはだれだ

K市の父から届いた
最後のメール
ケータイの灯りが
夜空の星に紛れていった

饗宴

畑ゆめじ

酸っぱい安酒を煽って
女も男も　電飾の下
空っぽの杯を　電子の鼓動に捧げる

平らな大地は嘘っぱちだろ
張り巡らされた血管は
タクシーのブレーキランプ

家に帰れば待っている
小さいベッド　ただいまのリフレイン
その海底の　蒼い冷たさを
忘れるために　ここに来た

この街に血を送るのは
暗闇突き刺す　あの鉄塔か

冷たいビルの間に
蒼い朝が　じっとたたずむとき
おとなたちは身を寄せ合って　目を閉じて
たった1人で　眠りにつく

大黒埠頭に立ち

畑ゆめじ

青い空と海
埠頭には赤いクレーンがあっちを向きこっちを向き
遠くに東電のツインタワーが白く長く伸びている

国際規格のコンテナ
国際規格の柵
ミニカーみたいな中古車は
ここから東南アジアに運ばれる

「ここで働くのは」
バス前方でガイドがマイクを握る
「ここで働くのは
２０代で大金稼ぎ、ある人は家を建て、ある人は酒に溺れ、ある人はギャンブルに　興じ、
でも皆　白いコンクリート建てマンションに帰っていく
生きるために働くのか
働くために生きるのか

そのどちらかの
もうどちらでもない男たちなのです」

国道３５７号
風に吹きあがるビニール袋
それを踏みつける　いくつものトラック
霞の中に房総半島を見やれば
左の空に羽田を出た白い飛行機が
小さく　右肩上がりに進んでいく

錆付き　役目を終えた埠頭の
入り口には　陽に焼けた横断幕
「がんばろう　日本」
頭を９０度にひしゃげた白い街灯が
黄色い灯りを灯せば
遠くに沈む夕日と
登りはじめた　白い月が見える

火葬

畑ゆめじ

２年前　白血病で死んだｍくん
その半年後に　１人ぽったり
眠るように死んだｎちゃん
２人とも最後は私の見えないところで
白くて乾いた　ホネになった

そこにはただ式があって
どちらも似たような式辞と
砂の上で黙ったまま　空を見上げるホネと
悲しみで　全身が冷たく濡れそぼった
故人のご家族があった

着慣れない喪服に身を包む１８の私たちは
テニスコートのｍくんのたくましい茶色の腕と
教室のカーテンの前に立つｎちゃんの
長いまつげが隠す黒くてまあるい瞳を思い出し

親族の輪の外に立ち
ただ両肩から
やりきれない拳をぶら下げていた

死ぬ希望

藤井夏子

今夜わたしが消えてしまうなど
きっと誰も想像していなかった

想像が現実に持ち出された時
わたしに接していた　かの人々は
わたしに花を手向けてくれるか
わたしが花を持ったなら
わたしに期待をしないでいてくれるのか
生まれ変わって
魂となって
あなたに逢いたいと願われること
しばらく今まだ
とっておこう

わたしはしばらく記憶にひたり
淡い空にプカプカ浮かび

星をなぞって遊びたい

わたしはしばらく何をも纏わず
赤い夕日を眺めつつ
太古の恐竜たちを愛でていたい

わたしはしばらく
はじめましてのクロマニヨン人と
おフランスの美しい遺跡について
納得いくまで語りたい

現世にさよならをして
苦しみから解き放たれたら

知人がわあっと集まって同じく夢を叶えてゆく
野心と苦悩に囚われず
在るべきものを在るべき様に
並べたり見つめたり抱き抱えたりする

わがひとに与える挽歌

渡辺信二

もしもおれたち　余命２年と言われたなら
１８階建てマンション最上階の
南東角部屋に引越して
朝日を毎日　２人で迎えよう

見張らせば　遠くに　凹凸の地平線が広がり
親と暮らした年月よりも
おれたち　一緒に暮らした年月が
すでに　もう　１７年も長いから

部屋の壁には　おまえとおれの写真を
たくさん鋲で飾ろう
楽しいだけじゃない
辛くて苦しい思い出がずうっと多いが

それも　おれたちの生きてきた

懐かしい大事な1コマひとコマだから
陽光をリビングいっぱいに広げ
ひがな1日　写真を眺めていよう

そして　定めの時が来れば
2人　手を繋ぎ　このヴェランダから
番いの小鳥のように
潔く　晴れた空へと飛び立とう

悔いはない　と言えば　嘘だ
来世で会おう　も　実現できるかどうか
今はただ　手を繋ぐ　この世のかたさをよすがに
晴れた空　遍く太陽に　魂を委ねる

小説家志望

渡辺信二

この珈琲店に座ると　いつも　思い出すのは
ぼくらの安寿伝説　それは　――小さい頃から姉さんが
いつかどこかで　ぼくの助けを待っている
そう　信じていたから

祖先をたどれば　この血には
商人　農夫　獣医が潜む
高楊枝の武士根性は　高々祖父が捨て去ったので
ぼくたちに貴族の血は　流れていません

姉さん　いつも身体が弱くて気の毒でした
一家離散を前に　進んで身を棄てた姉さんの
ほんとの願いは　早く死ぬことでした

ああ　姉さん　ついに　生まれなかった姉さん

ぼくは　出世して見せる　出世して姉さんを救う

――そっと　書きかけの短編小説を鞄から出す

シャボン玉から

渡辺信二

わたしは　シャボン玉
悲しみが　ゆっくり膨らむように
だいじに空に浮かびましょう
表面張力と風の微妙なバランス
たゆたう5秒間

そして　弾ける

でも　弾けるのは　わたしではない
青い空　白い雲　あなたがたの夢
もしも弾けるのが　あなたがたの胸の中なら
そこに穴を開けましょう

だけど　わたしは　シャボン玉
わたしが弾ける時は　何もない空の下
探しても探しても　誰の胸も見つかりません

2016,09,01～2017,03,15 のあいだに贈られた詩誌・詩集・詩書一覧

詩誌『タルタ』38, 39。
詩誌『ココア共和国』20。
詩誌『金木犀』20。
詩誌『白亜紀』146, 147。
詩誌『りんごの木』44。
詩誌『GANYMEDE』68。
詩誌『万河・Banga』16.
詩誌『光芒』78。
詩誌『GATE』23。
詩誌『銀曜日』46。

詩集『染礼』(橋浦洋志著) 砂子屋書房、2016 年。
詩集『虹の地殻』(橋浦洋志著) 砂子屋書房、2016 年。
詩集『馬ぁ出せぃ』(岡　隆夫著) 砂子屋書房、2016 年。
詩集『白亜紀詩集 2016』(著者代表　武子和幸)国文社、2017 年。

詩書『エリノア・フロスト』(サンドラ・L・キャッツ著、藤本雅樹訳) 晃洋書房、2017 年。

詩誌『立彩』第 9 号　2017 年 3 月 20 日　頒価 300 円
編集発行　「立彩」
〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3
フェリス女学院大学文学部英米文学科　渡辺信二研究室気付
印刷　東洋出版印刷株式会社　TEL 03-3813-7311